
仰ぐ月に紅を映して

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仰ぐ月に紅を映して

【Nコード】

N8095M

【作者名】

東雲咲夜

【あらすじ】

ある朝、少女は首筋に二つの痕を見つける。その後少女は、一人の男と出会って、一つの選択をする。――彼女が望むのは、誰も知らない自分

ふたつの赤い痕（前書き）

色褪せた日々と、色褪せない記憶。

ふたつの赤い痕

制服のリボンを直しているときに、首筋のそれに気づいた。ぽつん、と縦に並んだ二つの痕。うつすらと赤色をしているそれを、私は虫か何かに刺されたのだろうと思った。春先は、よくわからない虫はたくさんいるものだから。おおかた、眠っている間にでも刺されてしまったのだろう。鏡にうつる痕を見ていると首筋だからだろうか……なんとなく恥ずかしくなってくる。どうせ痕が残るなら、手とかのほうがよかったのに。そう思いながら、わたしはそれをシヤツの襟をたてて隠すことにした。少し変に見えるかもしれないけれど、痕を見られるよりはぜんぜんましだ。どうせ何日かすれば消えてしまっただろう。リボンを直して、髪を手櫛でとかして、みだしなみを整えた。そろそろ学校に向かった方がいいだろう。

「漕、もう支度は済んだのか？」

洗面所をでると、玄関のほうから兄の声が聞こえた。待たせてしまったかと、私は玄関へと急いだ。

「もう終わったよ。ちよつとのんびりしすぎたかも」

仕事前のスーツを着込んでいる兄が、わたしの鞆を手渡してくれた。ありがとう、と言ってから靴をはく。

「いつてきます」

玄関のドアを開ける前に、わたしはいつも誰もいない家に向かってそう言う。それがあの日からの習慣だった。

「今日は帰るのが遅くなるから……まあ、なんだ。一人でも平気だな？」

車に乗り込む寸前、兄はそう言った。

「平気。いつまでも子供じゃないんだから。仕事、頑張つてね」

「ああ。戸締りはきちんとするんだぞ」

その兄の言葉と共に、車のドアは閉められて、走っていった。わたしも学校に行かないと。正直あまり行きたくはないけれど、行か

ないと兄さんに迷惑がかかってしまうもの。早足で、私は駆けて行った。

家から徒歩で通える距離にあるのが、わたしが通っている高校だった。校門で行われている遅刻チェックもかわして、授業には間に合うことができた。担当の委員には、珍しいねといわれてしまったけれど。普段わたしはほとんどチェックが始まるよりも早く学校へと登校している。成績も標準以上を保っているし、マナーや態度もよくしている。塾には、なんとなく通っているだけ。教室へと入るなり、数人の生徒から声をかけられた。

「おはよう叶野さん。この時間に登校なんて、珍しいね。寝坊でもしちゃった？」

「少し遅くなっただけ」

「あ、おはよう。ねえ叶野さん、物理のノート貸してもらってもいい？」

「テスト前に返してくれるなら」

「やった。いつもありがとうねー」

その子はそういうと、わたしが鞆から取り出したノートをむしりとっていった。彼女は、いつもそういう風に持つていく。口には出さなくたって、仕草でどんな風私を見ているのかはわかる。困ったときに、手を貸してくれる、いい人。そんなところかな。わたしにとっても、彼女はただのクラスメイトだけで、知り合いでもなんでもない。物を貸してあげたり、話しかけられたら返事をするくらい。私はクラスの皆から嫌われてはいない代わりに、特別好かれではない。毎日うわべだけは笑顔で頑張っているけれど、ときおりぐったりしてしまう。

自分の席について教科書を整理していると、教室のドアを開けて担任が入ってきた。手には開かれた出席簿を持っている。だるそうに立つ人、机につっぱしたまま寝ている人。まったく気にせずに自分を飾っている人。注意することもなく、ただ諾々と号令がかけら

れて、挨拶が終わる。

「来週は一学期最初の試験があるからな。中間だからといって手を抜かないように。後で痛い目みるのは自分たちなんだからな。私達が頑張っても、お前らが頑張らなきゃ意味がない」

そういうと眼鏡をかけた神経質そうな担任は、音を立てて出席簿を閉じた。だらしない態度の生徒の欄には、出席がちゃんとついているのだろうか。そんな何にもならないことを考えながら、私は教科書を開いた。担任は授業を淡々と進めていくが、さほど興味はなかった。この範囲は、すでに塾ではかなり前に勉強し終わっていたから。学校に行くよりも、塾にだけ通っていた方が成績だけはいいんじゃないかしら。そんなことすら考えてしまうほど。行かなくてはならない場所なのはわかっていけるけれど、平凡すぎて少し飽きる平凡でありきたりな日常だとしても、それを噛み締めて生きていかなければいけないというのに。当然の重みのはずなのに、ひどく面倒に、やつかに感じてしまう。本当にわがままだと思う。

ぽかぽかと暖かい窓際の座席、さして興味もわかない担任の授業。それはわたしの眠気を誘うには充分すぎるほどで。暖かな日差しに抱かれて、悪夢の中へと落ちていった。

「こらこらみおちゃん。そんなに走ったら転んでしまうよ」

「大丈夫。おばあちゃん、はやくはやく」

お菓子の入った袋を揺らし、少女が後ろを振り向いていう。ゆつくりと歩いてくる老婆は穏やかな笑みで。待ちきれないとばかりに少女は走り、見知った家の玄関を開ける。おばあちゃんがたくさんおかしを買ってくれたの。こんなにいっぱい、食べきれるかな？

にこにこ嬉しそうにしながら、クツを脱ぎ捨て、リビングへと走る。ねえ、わたし帰ってきたよ。お母さんお父さん。お母さんは料理をしているのかな。お父さんは本を読んでいるのかな。それとも

二人でおしゃべりしているの？ まだまだ休みはたくさんあるから、明日はいつたい何をして遊ぼうか？ ねえ。ぐんぐん近づいてくるドア。後ろからは、おばあちゃんが入ってくる音が聞こえて。

「ねえ、ただいまっ！——あ」

何かに滑って、わたしは転んだ。

「だからいったんですよ、走ると転んでしまっつて」

ああ、おばあちゃんのいうとおり。でもわたしが悪いんじゃないの。だって、床がぬるぬるしているからすべってころんでしまったの。お母さんはちゃんと毎日掃除をしているのに、なんで汚れているの。お洋服に色がついちやっただ。でも、転んで痛くても泣いてないよ。ほめてくれるかな？

よいしょつとまた転んでしまわないように起き上がる。

「大丈夫だった？ ほら、おばあちゃんにみせてごらん」

そういうおばあちゃんのいうとおり、わたしはおばあちゃんの方を向いた。ワンピースのすそをつかんで、くるりと一回り。少し汚れちゃったけど、怪我はしてないよ、だからそんなに怖い顔をしてないでね。

「えっ……みおちゃん！ ちょっと、おばあちゃんのそばにおいで」「なんで？ あいさつしてからでもいいでしょう？」

「駄目ですよ。ほら、こっちにおいでっ！——」

おばあちゃん、痛いからそんなに強く腕をひっぱらないで。わたしはまだ、あいさつをしていないんだから。ちゃんとしないと、怒られちゃう。あいさつしたら、いうことも聞くし、お風呂もはいる。わたしはおばあちゃんの腕をふりきって、リビングへと飛び込んだ。「お母さん、お父さん、ただいまっ」

「お帰りなさい、漣」

「お帰り、漣」

二人の声が聞こえると思ったのに、部屋の中はとても静かだった。お母さんはお昼寝してるみたい、椅子に座って下を向いてるから、きつとそう。起こさないように、そうつと歩こうとしたけれど……

またぬるりと滑って転んでしまった。バタンツと大きな音がして、二人が起きたかとびくりしてしまう。もう、さっきからなんなんだろう。これじゃあおばあちゃんだって転んじゃうよ。やっぱり起きてもらわなきゃ。

「ねえ、お母さん起きて。床が汚れちゃってるよ、お掃除しないとわたしも手伝うから」

椅子に座るお母さんの腕をひっぱったけれど起きなくて。お母さんの体がぐらりと揺れて、床に倒れた。ねえ、いつまでも寝ていないで――起きてほしいのに。ああ、そういえばお父さんはどこ？部屋の中がぐらりとみわたすと、ソファに横になっていた。……ソファも汚れてしまってる。はやく掃除しなきゃ。お母さんお父さん、そろそろ起きて。そんなところで眠っているから、服が汚れているよ。そういえば、わたしもさっき転んだよね。そう思って自分の手を見ると、赤い汚れがたくさんついていた。

「みおちゃんっ!」

おばあちゃんの声が聞こえる。どうしてあんなに大きな声をだしているんだろう。でも、二人が起きるかもしれないから、いいか。わたしも、お父さんもお母さんも。すぐにお風呂に入ったほうがいいよね。だって、みんな真っ赤なんだもの。

「おい、叶野。話を聞いているのかっ?」

少し苛立った担任の声で、わたしは目を覚ました。少しの間、眠ってしまっていたらしい。とても嫌な夢を見たせいか、頭がぐらくらした。

「あ……すいません。続けてください」

素直に謝罪の気持ちを込めたけれど、担任には伝わったのか、伝わらなかったのか。

「いや、顔色が悪い。体調が悪いなら、医務室へ行ったらどうだい?」
ため息をつきながら、彼はそういった。俺の授業を聞く気がない

のならいい、と顔が語っていた。

「じゃあ、体調が悪いのでそうします」

むっとしながらも、気分が悪いのは事実なのでわたしは教室をでて医務室へと向かった。

医務室のベッドの中で、わたしは休んでいた。どことなく、病院のような香りと色彩を感じる。ドアは開いていたが、先生がいなくて困ったけれど、ここにいるのは担任が知っているから問題はないと思うことにした。ベッドで横になっっているというのに、ぐらぐらと揺れているような感覚で眩暈がする。体の問題じゃなく精神的な問題だから、休んでもあまり効果がないのはわかっていて。

あの時の夢を見たのは何年ぶりだろう。ここ最近は見えていなかった。それだけに、強烈だった。わたしがまだ幼い頃……小学校低学年くらいだったと覚えている。父と母、それに祖母と暮らしていた。ごく普通の家庭で、特に困ったこともなく幸せな生活だった。そのまま何事もなければよかったのに、と何度呟いたかは覚えていない。わたしたち家族を通りすがりの悪意が襲ったのは、春の、なんのへんてつもない休日だった。その日、両親は家で思い思いにくつろいでいた。わたしは、おばあちゃんに連れられて近所の駄菓子屋さんへと行っていた。おばがたくさんのお菓子を買ってくれたので、わたしはとても嬉しかった記憶がある。小さな袋にたくさんつまったお菓子を早く見せたくて、走って家へと帰った。家をでてから二十分くらいしか経っていなかったけれど、二人の顔を見たかった。

弾むような足取りで家に帰ったわたしを待っていたのは、悪夢としかいえないような光景だった。もっとも、いまだからこそ悪夢といえるけれど、その瞬間は何が起こっているのかよくわからなかった。リビングの床に転がっている父親。椅子にぐったりと座っている母親。辺り一面へと飛び散っている赤い血の痕。意識はしていなかったけれど、濃い血の匂いがしていたのだろう。わたしは両親が眠っているのだと思って引っ張ったけれど、当然二人は起きること

もなく。わたしが入ってからしばらくして、祖母と警察の人が駆け込んできた。どたと大きな足音が響いたのを覚えている。すぐにわたしは祖母に抱きかかえられて、浴室へとつれていかれた。そのまま、いきなりシャワーで水をあびせられてひどくびっくりした。今思えば、祖母もかなり気が動転していたのだろう。

父と母を殺したのは、通りすがりの悪意だった。その犯人は、いまだ見つかっていない。謝罪して欲しいとは思わなければならないけれど、死んでほしいと思うわたしはおかしいのだろうか。わたしが両親を亡くしたとわかったのは、それから数ヶ月たってからだ。いないのはわかってはいたけれど、何処にもいないというのが理解できなかったから。ひどく悲しかったけれど、泣いた記憶はない。祖母は、それからわたしの世話をしてくれたけれど、数ヶ月後に亡くなってしまった。突然の心臓発作だった。祖母がいきなり家で倒れてしまったとき、わたしの心臓も止まってしまいかと思った。何度も番号を押し間違えながら救急車を呼んだけれど、間に合わなかった。

父と母と祖母を亡くしたわたしは、親戚の家へと引き取られることになった。幼稚園くらいのころに何度かあったことのある、親戚の兄。その人は一人暮らしをしていたのだけれど、快くわたしを受け入れてくれた。それ以来、いまでもすごくよくしてくれている。こうして、わたしは今まで生きてきた。

横たわりながらそのことを思い出していたら、体調がよくなるばかりか、教室にいたときよりも気分が悪くなってきた。はつきりとした赤い夢は、気持ちが悪い。あと少しだけ休んだら、早退してしまふことにした。普段の態度がいいから、別に文句はいわれないうろ……体調が悪いのは本当なのだから。今度は夢を見ないことを願って、わたしは瞼を閉じた。

その後わたしは早退をして、家へと帰った。しばらくはベッドで眠ってみたりもしたものの、寝すぎで頭が痛くなった。夜眠れなくても困るので、本を読むことにした。自室の本棚から取り出して、

しおりを辿る。……古びたブックカバーに包まれた、不思議の国のアリス。子供向けの本に思えるけれど、読めば読むほど楽しくなる本だ。読むたびに新しいものを見つけられる。もう何度わたしはウサギ穴へと飛び込んだだろうか。時間も忘れて、わたしは本を読みふけた。

無心で読み続けてからどれくらい時間がたったのだろうか。ウサギ穴へと飛び込んで、女王とクロケーをしている頃。部屋のドアが控えめにノックされて、わたしは夢から覚めたような感覚を覚えた。本に没頭しすぎていたらしい。慌ててドアを開けると、そこには兄が立っていた。わたしは驚いて、部屋の中にある時計で時間を確認する。……まだ、夜の七時を過ぎたくらい。遅くなると思っていたのに、どうしたのかしら。

「お帰りなさい、兄さん。ごめんね、本読んでたから気づかなかったの」

「邪魔したか？」

「ううん。何度も読んでいる本だから、平気よ。それで、どうしたの？ 随分早いみたいだけど……」

わたしがそういうと、兄は心配そうな顔をしながらいった。

「どうかしたって、具合悪いんだろう、零？」

「えっ……なんで兄さんがそのこと知ってるの？ あ、もしかして連絡いっちゃったの？」

「ああ。電話が来てな。心配になったから早めに仕事切り上げて来たんだ」

その言葉を聞いて、仕事の方は大丈夫なのだろうか、わたしは不安に思った。今日は遅くなるかと思っていたのだから、それなりに大事な用があっただろうに。

「わたしの具合なら、もうほとんど大丈夫。結局は精神的なものだから。ごめんなさい、面倒かけちゃって。仕事の方は……大丈夫だったの？」

「それは気にしなくて構わない。やることはしっかりと終わらせて

きたからな。特に問題はない」

兄はいつでもわたしに優しくしてくれる。そんな兄を疑ってしま
うわたしはおかしいのだろう。本当は大変だったんじゃないかと、
思ってしまったから。しっかりしてる人だから、中途半端なことは
しない。それをわたしは知っているのに、わざわざ聞いてしまうな
んで。なんだか罪悪感に駆られてしまふ。ああ、なんて面倒なんだ
ろう、わたしったら。顔には出さずにうじうじしていると、兄が
わたしを手招いた。

「顔色は大分平気みたいだな。時間も時間だから、夕食にしないか
？ もちろん、食欲があればだが……」

わたしはすぐに、もちろん、と返事をした。少し貧血気味なのは
事実だし、なによりも——兄は料理が上手だから。それに最近兄
とあまり夕食を一緒に食べていない。少しなら、他愛のない話をし
ても平気だろう。今できることは、また体調を崩したりして、兄に
迷惑をかけないようにすること。

ベッドの上に置きっぱなしにした本を棚へと戻してから、リビン
グへと階段を降りていった。

好物ばかりがそろった食事を兄とってから、何時間がたったの
だろう。寝苦しいわけでもないのに、わたしは眼を覚ました。寝ぼ
け眼で枕元の携帯を見ると、午前二時を少しすぎたくらい。喉が渴
いていたから、リビングへと行って水を飲んだ。まだ少し、お腹が
重いような気がした。好きなものばかり兄さんが買ってきてくれた
から、ちよつと食べ過ぎたのかしら。でもそのせいか、ぼんやりと
はしているものの、体調はとくにおかしいところはなかった。これ
なら、明日は問題なさそう。安心したのか、急に眠気が襲ってきて、
慌てて部屋へと戻る。ふと部屋の窓を見ると、カーテンが開いてい
たので、閉めなおした。

ひとつ欠伸をしながら、ベッドへと潜り込んで……瞼を閉じよう

としたときだった。かたん、と小さな音が聞こえて、わたしは上半身を起こした。ぼうつとしながら、部屋を見渡すと、さっき閉めたばかりのカーテンが微かに揺れていた。隙間風か何かかな……と思った。閉めようかとも思ったけれども、ベッドから出るのも面倒だったので、そのまま寝ようとした。潜り込む前になんとなく気になつてカーテンの方を見やると、人影が見えたような気がして。わたしは、ぱちぱちと瞬きを繰り返した。よく眼をこらしてみても、カーテンが揺れているだけで。何にもないじゃない……そう思って、瞼を閉じようとして。

仰向けに見える天井に、二つの赤い色が見えて。驚いて、眼を開いた。視線を動かすと、ベッドのすぐ側に誰かがいた。暗くて顔はよく見えなかったけれど、二つの赤だけは浮かぶようにはつきりと見えた。おかしいものを見ているはずなのに、わたしはただ驚いた。悲鳴をあげてみようとか、飛び起きようとは何故だかわわなくて。ただただ呆然とその色を見ていると、白くて長い指がわたしの顔の方へと伸びてきて——わたしは気を失った。

ふたつの赤い痕（後書き）

久しぶりの連載となります……とはいっても短めですが、
彼女が旅立つまで、見届けてやってくださいませ。

夜の訪問者（前書き）

現実から目を背けて、幻想へと飛び込もう。

夜の訪問者

翌日の天気はとてもよく晴れていて、運動をするのにはちょうどいい天気だった。体育の授業で、クラスメイト達は気持ちがよくさうにしながら体を動かしていた。わたしは、木陰のベンチで授業を見学していた。今日は朝から貧血気味でふらふらで、とてもじゃないけれど運動を出来るような体調ではなかったから。昨日は兄さんが作ってくれた、栄養たっぷりの料理を食べたのに……急には治らないものなのかしら？ そんなことを考えながら、運動している生徒達を眺める。

茶髪や金髪、染めたのであろう髪が太陽の光を反射してきらきらと光る。眩しいと思い眼を細めるけれど、わたしはその色を羨ましいと思った。校則では髪を染めることは禁止されているけれど、彼らはそんなこと気にもとめていないのだろう。また、先生の方も、そういった生徒達は見放しているようなものだから、どうでもいいのだろう。わたしが髪を染めたりしたら、ものすごい勢いで怒られるような気がする。そして聞かれるのだろう、模範的な生徒であるわたしが、どうしてそんなことをしたのか……と。想像しただけでうんざりして、わたしは自分の長い髪に触れる。人によっては羨ましがりそうな、艶のある黒髪。嫌いではないけれど、色鮮やかな髪も羨ましいと思う。結局は、自分では何もしないのだけれど。

天気もよく気温が高いのに、ジャージを着ているせいで、少し蒸し暑く感じた。首筋を隠すために着ているのだけど……本当に隠す必要があるのかと、疑問に思ってしまう。前よりは、薄くなっているのだし……ただの痕にすぎないのだし……迷ったあげく、わたしはジャージを脱いで膝において、抱えた。たいしたことないわ。そう割り切ると、残りの時間をひたすら空を眺めて潰した。

その後の授業もぼんやりと過ごし、放課後の塾でも少しうたた寝をしてしまった。講師に起こされてしまった、と思っただけで、寝てしまったものは仕方がない。素直にあやまり、いくつかの難しい問題を解かされるだけですんだ。寝起きの頭でも、頑張ったほうだと思う。塾についていけないわけではないのだけれど、頑張れば頑張るほど疲れてしまう。やりすぎなのかどうかわからないけれど、塾が終わる頃には夜の八時を過ぎていた。駅から乗り継いだバスを降りて、家へと向かって歩く。時間のせいか、普段は人通りが多いのだけれど、自動車も自転車も、歩いている人すらもほとんど見かけなかった。誰ともすれ違わないことを寂しく感じながらも、一人歩いていくと、前から男の人が歩いてきた。長いコートのようなものを着ていた。街灯も少ないせいで、暗くてよくは見えなかったのだけれど。浮き上がるような白い肌と、整った顔立ちだけは見るこゝとができた。その人が通り過ぎてしばらくしてから、わたしはずっと見ていたのだということに気が付いて、一人恥ずかしくなった。でも、みとれてしまうくらいには、綺麗だったのだと思う。暗闇に溶け込むかのような、長髪だった。あまり他人に感心のないわたしにしては、珍しい。なんていうのだろうか。すれ違う人全員が思わず振り返ってしまうような、そんな雰囲気だった。だからだと考えながらもすたすたと歩いていたら、家の近くまで来ていたので、足を速めた。誰もいない家へと鍵を使っではいる。玄関の明かりをつけて、わたしは一人つぶやく。今までに何度も繰り返した、おかえり、と。今は誰もいないから当然返事が返ってくることもなく。なんとでもいいようなない脱力感に襲われながら、階段をあがり自室へと向かう。鞆を机の上に置くと、制服もそのままにベッドへと飛び込んだ。慣れた自分の部屋とふかふかの布団が気持ちいい。うつぶせに顔をうずめたまま、うとうととまどろむ。つかれた体は重くて、すぐにでも眠ってしまいそうだった。気分的にはいますぐにでも寝てしまいたいけれど、今寝たら夜寝れなくなるに決まってるわ。そうしたら、また明日体調が悪くなってしまう。それだけは避けない

と。

だるい体でベッドから起き上がり、サイドテーブルに置かれた写真立てのひとつへと手を伸ばす。兄とツーショットで映っている写真。なかなか写真に映りたがらない兄を説得するのが大変だった記憶がある。思い出すと、なんとなく頬が緩む。その写真立てを置き、深呼吸してから隣に置かれていたもうひとつの写真立てを手に取る。この写真立てに入っているのも、どこかへ旅行へいったときのもの。さっきのと違っていている点は、写真にシミが残っていて、少しぼやけてしまっていること。色々な方法を試してみたけれど、完全に汚れを取り除くことはできなかった……人の血液というものは、こんなにも消すことが難しいのだと知った。うつすらと淡く残るシミを見ていると、匂いまでもが感じられる気さえしてしまうけれど、それは私の思い込みで、錯覚にすぎない。もう十年以上たったけれど、瞼を閉じれば鮮明に思い出すことができるあの光景。覚えていたくなんてないし、忘れてしまえたらどれだけ楽になるだろうと思う。でもそれは両親のことを否定してしまうようなもの。あつてはならないこと。割り切れないわたしは、こうして繰り返し思い出す。そのたびに、意味がないとわかっていても、自問をしてしまう。わたしは今、幸せなのだろうか……。誰からも答えなんて、返ってくるはずはないのに。写真立てを置いてまぶたを閉じると、赤い色が透けて見えた。

その後兄から、仕事で遅くなるとの連絡がはいったわたしは一人で夕食を済まし、自室へと向かった。本を読むことが好きで、家では暇さえあれば本を読んでいる。特定の作家にこだわってはいないので、色々なジャンルの本があるけれど……数冊同じタイトルのものがある。不思議の国のアリスに、地下の国のアリス、英語から翻訳されたものでも、その人によって言い回しが異なるので、ついつい集めてしまった。現実ではありえないようなことが書

かれているけれど、それがまた楽しい。こういった非現実的なことを、わたしはとても羨ましく思う。わたしは本を読むときは、自分がまるでその人になったかのように錯覚してしまうけれど……そういう願望でもあるのかもしれない。そのときだけは、わたしが別の人になっているような感覚が心地よい。色んなことを忘れていられるから。そうしてわたしはまたアリスの世界へと没頭していった。

本を読み終えて、わたしは大きく背伸びをした。時計を見ると、ちょうど夜の零時になるところだった。普段は十一時くらいに寝ているから、少し夜更かししてしまったことになる。本をしっかりと棚にしまってから、わたしは部屋のカーテンを閉めようとして、窓の外を見て小さく悲鳴をあげてしまった。昨夜と同じ人がベランダに立っていた。驚いて座り込んだわたしを、その人も驚いた顔をして見ていた。どうしてベランダにいるのかとか、何故驚いているのかとか思っただけれど、腰が抜けてしまっただけどころじゃなかった。部屋の明かりのおかげで、今日は顔がはっきりと見えた。少し不健康そうな白い顔とそこだけ輝いているかのような赤い瞳。夜に紛れているのは艶のある黒髪。彫りが深いから、他の国の人かもしれない、とわたしは思った。彼は少し困ったような顔をしていたけれど、しばらくすると何も言わずに消えた。正確には、ベランダから飛び降りた。

「え……ちょっと、待って！」

びっくりしすぎて腰を抜かしていたことも忘れて、わたしは慌ててベランダへと飛び出して、下を覗き込んだ。普通は二階から飛び降りたら怪我くらいするはず。そう思っただけなのだけれど、下には誰もいなかった。暗くて見えていないだけなのかもしれない。たけれど。あの人、確かにここから飛び降りたのに……何処へいったしまったのだろう。どうして、またわたしの所へ来たのかしら。気になることはたくさんあったけれども、考え込んでもどうにもならないだろう。わたしは不思議に思いながらも、その日は眠りについた。

夜の訪問者（後書き）

不審者登場です（笑）

重要なのが重要じゃないのかよくわからない人。
実際にいたら警察に通報ものです。

それでは、次回も会えますよう。

人ならざるもの（前書き）

どんな風に生まれたとしても、ただ生きるだけ。

人ならざるもの

寝起きで頭はぼうつとしていても、体は普段どうりに動いた。寝ぼけながら歯をみがいて、服を着替えて、制服を整えて。兄が用意してくれた朝食を取ってから、鏡の前でどこかおかしなところがないかを確認する。何か食べれば、自然に頭のめぐりもよくなるらしい。さきほどよりははっきりとした意識で、チェックをする。少し曲がっているリボンを直して、はねた寝癖をむりやり直す。ひととおり終わったら、首筋も確認してみた。二つの痕は、初めて見つけた日より薄くなっているような気がした。なかなか消えないものなのね……そう思いながらも、襟を立てて隠す。この調子ならば、あまり気にしなくてもよさそうだった。仕度をし終わっても、まだ少し家をでるには早い時間で。わたしはリビングで新聞を読むことにした。ざつと各面に眼を通していると、後ろから肩を叩かれた。

「おはよう雫。少し顔色が悪いが……今日は大丈夫なのか？」

「そう？ 体調は昨日よりはいいわ。大丈夫だから、昨日はごめんなさいね、迷惑かけちゃって……」

さつき鏡でみた自分の顔を思い出しながら、返事をする。体調も特に悪い感じはしないし、一応昨夜はなにもなかったのだし。それよりもわたしは兄に手間をかけさせてしまったことが気にかかっていた。

「迷惑に思ってたなら、わざわざ様子見に帰ったりしないだろう？」

「変なことを気にするんだな」

「変なことって……ひどい。でも、兄さんがそういうならそれでいいわ」

わたしがそういうと、兄はわたしの頭に、ポンと手を乗せた。子供扱いされているようで、なんだか気恥ずかしく感じる。

「気にしなくていいんだ。それじゃあ、今夜も遅くなるから。しっかりやるように」

わかったと、返事をしてから、家をでていく兄を後ろ姿を見送った。その後新聞を読み終えてから、わたしは学校へと向かった。

なんだか集中できずに授業を受けて、あつというまに学校が終わってしまった。いったい何を気にしているのかと首を傾げながらも帰り道を歩く。今日は塾がない日なので、時間が早く、道を歩く人の数も多かった。学校帰りの学生、主婦や散歩をしているお年寄りの人。人が多いかわりに、自動車や自転車の量も多いので少し危ないのだけれど。学生達の賑やかなおしゃべりが、少し落ち着くけれど、うつとうしい。近寄らないように歩いていると、前から学生の集団が歩いてくるのが見えた。邪魔になつてしまわぬように、とさらに端にわたしは寄った。人の群れが通りすぎる瞬間、わたしは黒衣の人とすれ違ったような気がして、慌てて振り返った。しかし振り返っても、いるのは学生ばかりで。きっと見間違いにちがいない。そう思いながらも、何度か後ろを振り返ってしまった。変な自分に戸惑いながら家へと向かった。どうして、こんなにも気になるのだろうか。

食事を済ませ、兄の分もしっかりと用意をしてから、お風呂へと入った。浴槽にたつぷりと張られたお湯のなかに、ハーブの入浴剤を散らすと、落ち着く香りが浴室全体に広がった。香りを吸い込むように深呼吸をしながら、体についた泡を流していく。流し終えて、わたしは首筋の痕を見た。他のところと比べると、赤さがやはり目立つ。よく見ると少しくぼんでいるような、へこんでいるような感じになっていた。お湯がしみたり、痛くはないだけに不思議だ。かゆかったりもしないし。感覚的にはなんともないのに、痕はしっかりと残っている。本当に、これは何なのかしら？ 鏡に映る痕を指でゆっくりとなぞると、うつすらとしびれたような気がした。

少しぼうつとしてから、わたしは湯船に浸かった。湯に浮かぶ花

を指先でもてあそぶと、香りが指に移った。強い香りにくらくらしながら、とりとめのないことをわたしは考える。明日のご飯は何にしようか、とか何の本を読もうか。でもたいしたことは浮かばなくて、それだけ自分自身がつまらない人間のような気持ちになってしまった。こういう風に後ろ向きに考えるようになってしまったのは、いつ頃からだろう。記憶を辿ってもぼんやりとしていて、はっきりと思い出せない。幼稚園くらいのころは、明るかったはずなのだけれど……思い出したくないことの方が多くて、頭が痛い。それに長く浸かりすぎたのか、視界がぼやけている。長風呂しすぎたみたい……あがらなくちゃ。わたしはバスタオルを巻いて浴室を後にした。

髪を乾かしてベッドに入っただけはいいものの、体が温まりすぎたのか、なかなか寝付くことができずにいた。右に左に寝返りを打っては、結局真つ暗な天井を見つめる。……なに不毛なことやってるんだろう。眠れずにもぞもぞと身動きを繰り返していると、ベランダの方から物音が聞こえて、わたしは毛布からそろりと顔をだした。暗い部屋の中を見て、闇の中に赤を見つけて上半身を起こす。ベッドサイドの明かりを手探りでつけると、カーテンの影に隠れるようにして、黒衣の人が立っていた。

「あなたは誰なの？」

「人に名乗る名は持ち合わせていない……眠ってればいいものを」
「まるで、わたしが起きてたら迷惑みたいないい方」
「手間が増えたただけだ」

名前を尋聞いただけなのに、余計なおまけまで返ってきてしまった。カーテンの側で腕を組む彼に向かってわたしはまた尋ねる。

「あなた、昨日もいたみたいだけれど、何をしに来てるの？」

「何故そんな事を聞く？ 知る必要はないだろうに」

「どうしてって……」

何をしに来てるかもわからない人に用を聞くのはそんなにおかし

いことなのかしら？ 見ず知らずの人なら、余計に気になるものじゃないのだろうか。

「用がないのなら、帰ったらどう？ 気になって眠れないわ」

整った顔を見ながらそういった。小さな明かりしか灯っていないのに、赤い瞳がくつきりと見える。

「用ならある」

ぶっきらぼうに、彼はそれだけ口にした。その用が何なのか気になっっているのだけれど。容姿は整っているのに、言葉は鋭い。

「なら済ませて帰ればいいわ」

「そう思うなら、さつさと眠ることだな」

「寝ろって……この状況で寝れるわけないでしょうっ。知らない人が部屋にいるのに」

「ならいなくなればいいのか？」

この人はいったん何処かへいつても、また少ししたら戻ってきていそう。つまりは、同じこと。

「後で戻ってくるなら同じよ。もう、用件って何なの？」

「用を言って、納得するとは思えないが」

わたしは無言で彼を睨みつけた。話が堂々巡りになってしまふ……いつまでたつても眠れない。じっと見ていると、彼はため息をつきながら言った。

「用件は簡単だ。血がもらえればいい」

さらりと言われた言葉は、とんでもないことで。何をいつているのか理解はできるのだけれど、意味がわからなくて……わたしは絶句した。言った本人はなんでもないような、いたって普通の顔をしている。むしろ無表情なのかもしれない。

「理解できないほど、頭が悪いわけではなさそうだが？」

口の端をつりあげながら、彼は言った。笑っているようにも見えない。ああ、口から僅かに覗いているのは牙だろうか。人間の歯なら、あんなに鋭くはないはずなのに。あの牙はいったい何に使うのだろう。それに、血が欲しいだなんて。そういう病氣の人はいると本

で読んだことはあるけれど……実際にいるのかしら。それとも、ただ単におかしな人なのか。頭の中を、ぐるぐると妙なことばかりが回る。

「今、変な奴だと思っっているか？」

「——当たり前でしょう。いきなり血が欲しいなんていわれて、そう思わないはずないじゃない。これは普通の反応だわ。誰だって、きつとそうよ」

ああそうだった、と彼は呟いた。今までにも同じような反応をした人がいたのだろうか。

「勘違いするな。元々、そういう風に生まれただけだ」

明かりを眩しそうに見ながら彼はそういう。最初からそうなのだと。否応なく、そうなってしまった人もいるのだろうか。自分で、血を欲しがる人もいるのでしょうか。

「で。答えは？」

彼にそう促されて、わたしは我に返る。

「はい、なんていわないのはわかるでしょう……？」

「まあな。なら、眠らせるだけだ」

次に聞こえた彼の声は、ベッドのすぐ側まで来ていてわたしは驚いた。動いた音すら聞こえなかったのに。いつかと同じように、白い手が伸びてくるのが見えているのに、身動き一つできなかった。目を覆い隠すように手が置かれる寸前まで、わたしは彼の赤い瞳をずっと見ていた。急激な眠気に襲われて、わたしの瞼が閉じていく。意識を手放す寸前まで、赤い色が瞼に焼きついた。

人ならざるもの（後書き）

カレにとって、寝てようが起きてようが、関係ないようです。
一応断ってから眠らせるのは、性格でしょう。

それでは、また次回。

分かれ道（前書き）

赤が示すのは、長い長い夜の旅

分かれ道

その翌日、わたしは寝坊してしまい、学校に遅刻した。だらしないと担任に怒られ、クラスメイトの人達からはどうしたのかと驚かれ……朝から気分が良くなかった。けだるいのは貧血のせいなのかもしれない。ろくに集中もせずに授業をやりすごしてから、私は駅の近くにある図書館へと向かった。学校からはバスで駅まで行つて、さらにそこから少し歩かなければならないため、意外と面倒。けれどもその分、地方の図書館にしてはかなりの数の蔵書があつて、調べ物をするにはもってこいの場所だった。学習コーナーへと鞆を置いて、大量の本の中から目当てのものが載つてそうな本を探す。色々な分野の本を漁つてから、数冊を選んで座席へと持つていく。

医学関係の本と、伝記、神話などがまとめられた本を読みすすめる。血液嗜好症——別名ヘマトフィリア、ヘマトディプシアと呼ばれる。血液に対して異常な執着を見せたり、血を見ることによって快感を得たりする、精神病の一種。血を見なければ、満足することができなくなってしまう……わたしは口の中で小さくその名前を呟く。ヘマトフィリア。不思議な響きの名前だと思う。でも、これはちょっと違うような気がする……ただの勘なのだけれど。あの夜、そんなに切羽詰つたようには見えなかったから。本のページをめくつていくと、吸血病というものがあつた。これはヴァンパイアフィリアと呼ばれるらしい。自分で衝動をコントロールでき、病気の予防などもしっかりとできるならば、他人に害を及ぼすことの少ない症状ではあるらしい……それでも、一般的には疎まれることが多いと書いてある。タバコやお酒のように、習慣的に血液を摂取しないと情緒不安定になつてしまつたりするらしい。あまり彼に、そういう病的なものは感じなかったのだけれど……あまりあてにはならない。医学関連の本を閉じて、次の本を読み出す。

吸血鬼……いわゆるヴァンパイア。人の生き血をすすり、生きな

がらえる化け物。ヨーロッパ地方が起源らしい。一度死んだものがよみがえり、夜の間に人に害をなす、というのはどこでも共通しているようだ。首を切断したり、白木の杭を心臓に打ち込むことで殺害できる……また、日光に当たると灰になる。不老不死、何か特別な能力を持つているといわれ始めたのは、ずいぶん後の時代みたい人間と吸血鬼の混血はダンピールと呼ばれ、親殺しの能力に長けていると書かれていた。人じゃないあげくに、親殺しに長けてるなんて……ひどい話だとわたしは思った。忌み嫌われた、夜の住人。基本的には首から吸血するようだけれど、身体を食い破る者もいるらしい。彼らに殺されたものもまた、吸血鬼になるらしい。疫病とい、嫌なことといい……よく連鎖するものね。昔では、実在されると信じられている村などでは、狩りなどが行われていたらしい。また退治を仕事とする人達もいたとのこと。実はその人が張本人だった、とかつてあったのかしら……ミイラ取りがミイラになるみたいな。

その本には、他にもたくさん情報がのっていた。にんにくが苦手だとか、十字架が苦手だとか……鏡に映らないというのは聞いたことがあったけれど。作品で有名なものはブラム・ストーカーのドラキュラなど。名前の由来になってるのは、ルーマニアのヴラド公串刺し公……カズィクルベイ。これはトルコ語らしい。

本から目を離して、軽く身体を腕を伸ばした。集中して読んだせいか目が少し疲れた。

こういった話にのっているものたちは、実際に存在するのかどうかはわからない。そんなものはいない、といいきることもできない。わたしは、いないとは思わないけれど……自分の目で見たなら、いと思う。あの彼が、ただの血液嗜好症なのか、人間ではないのか——どちらにせよ、怖くはないのだけれど。自分でも変だと思うけど、人間以外のもの、そういったものにわたしは憧れのようなものを抱いているのかもしれない。とても可笑しなことでも。彼は、人を殺したことがあるのだろうか。わたしも……いずれ死んでしまう

のだろうか？ いっそ。いっそ死んでしまった方が楽なのだろうか……でもそうしたら、わたしが何処にもいなくなってしまう。それは、嫌だ。誰かが覚えていてくれるなんて、淡い望みには期待できない。

館内に響いたアナウンスに気が付いて時計を見ると、閉館時間が迫っていた。わたしは選んだ本からさらに二冊ほど選んで借りた。続きは、帰ってからでも読めばいいだろう。少し重くなった鞆を肩にさげながら、私は帰宅した。

その日も兄の帰りは遅いらしく、留守電に入っていた。わたしは一通りの雑用を済ませてから、自室へと行った。お風呂も済ませてしまったし、あとはもう眠るだけ。この状態になるとすごく気が楽になる。ベッドサイドの小さな明かりだけをつけて、図書館で借りてきた本を読み出した。先ほど読んだものとは似ている分野だった。違う国の、神話や伝承。こういった分野の本は、いくら読んでも飽きることがないと思うのはわたしだけだろうか？ 知識が増えれば、色々と比べて考えることもできるし。あまりこう思う人は少ないのかもしれないけれど……わたしは好きだ。おとぎ話の中で生き続けるものたち。今となってはほとんど目を向ける人は少ないだろうけど……それでも確かに息づいている。想像にすぎないとしても、素敵だろう。夢中になってページを繰っていると。

「また随分とくだらないものを読んでいるな——」

窓の方から聞こえた声に驚くことはせず、わたしは本から顔をあげた。

「くだらなくなんてないわ……あなたのことでしょう？」

「何を言っているのかわからんな？」

窓の側に立つ彼へとわたしは言った。返ってきた言葉は、憎らしいものだけれど。ああ、まだ彼には言いたいことがあったんだわ。

本を閉じて、側のテーブルへと置いて、身体の向きを窓の方へと変える。

「そうそう……昨日はどうも？ おかげでわたし、久しぶりに寝坊したわ」

寝坊なんて、ずうつとしていなかったのに……余計な恥をかいてしまったのよ。色々な思いを込めて睨みつけたのだけど、やっぱり全然効果はないみたいで。

「……俺のせいにするつもりか？ 寝過ごしたのはお前だろうに」
しかも返ってきたのは、まっとうな答えで。それ以上は何も言い返せなかった。しばらくわたしは口をもごもごとさせてから、わたしは尋ねた。

「ところで……あなたって、吸血鬼なの？」
わたしがそう尋ねると、彼は整った眉を歪めた。何をいつているのか、といった表情だった。

「あなたが言ったんじゃない、そういう風に生まれついたって。忘れたのかしら？」

「……なんとも思えばいい、好きにしろ」
呆れたようにそう言われてしまった。反抗しても仕方がない……わたしには、彼に聞きたいことがあるのだから。

「ねえ、聞きたいことがあるんだけど……」
そういつても、彼は無反応で。わたしの方を向いてはいるのだけれど。構わずに言葉を続けた。

「わたしも、吸血鬼みたいなものになれるのかしら？」

そういつた途端、彼にものすごい形相で睨みつけられてしまった。負けじと彼の目を見ながら、答えを待つ。

「……死にたいのか？」

静かに彼はそう言った。それと同時にわたしから目をそらした。

「死にたいわけじゃないわ。わたし以外のものになりたいだけ」

わたしは、誰も知らないわたしになりたい。そうすれば、余計なものは何もなくなるから。

「人としては死ぬぞ。なんにせよ、愚かな選択だ」

「おかしいのは承知よ。結局はどうなの？ 何か方法があるなら……」

「あるにはある。成功するかは知らん」

ぶつきらぼうにそういわれて、無駄とは思いつつもいらつとしてしまふ。……今は尋ねている側なのに。深呼吸をはさんでから、言葉が続けた。

「そう……お願いできるかしら？」

「やると思うか？」

「だから、お願いしてるんじゃない。ちょっとくらい聞いてくれてもいいじゃない」

「子守はごめんだ。方法だけ教えてやる……その足りない頭でよく考えることだ」

突き放しておきながら、助け舟だけ用意されたような、そんな気分になつた。相手にされてるのかされてないのか、よくわからない。方法だけ……どうすればいいのやら。大人しく、彼の話聞くことにした。

「とても簡単だろう？」

彼はそういつて、牙をむき出しながら笑った。それは、とても凶暴な表情だった。わたしはというと、ベッドの上で軽く放心状態におちいつていた。彼が説明した方法とは、こういうものだった。

心臓を役に立たなくしてから、血をもらつ……

確かに彼がいうとおり簡単なんだろう。けどなんて残酷な方法だろう。役に立たなくする……彼によると、潰すのが手っ取り早いそう。考えただけで、頭がくらくらする。

「だから言っただろう、人としては死ぬ、と。何がそんなに駆り立てるのかは知らぬが……」

冷ややかにわたしを見下ろして、彼は告げる。

「後は、自分で選択するがいい」

そういい残して、彼は消えた。外からではなく、その場からおぼろのように消えてしまった。だんだんと姿が薄れていく様を見たあと、わたしは一人ベッドで膝を抱えた。

「わたしは、どうしたらいいのかしら？」

こんなときまで自問自答しているなんて、バカなのね、きっと。強く強く膝に爪を立てると、鈍い痛みを感じた。

分かれ道（後書き）

残り2話となりました

どうしたらいいって……知るかポケエと最初思った東雲がいます（
コラ

ぐだぐだしてきましたが、お付き合いいただけたなら喜びます

選択した夜（前書き）

痛みの中でまどろんで、目の前に広がるのは。

選択した夜

話を聞いてから二日後、私は学校を休んだ。

前日はちゃんと登校したのだけれど、ろくに授業に集中することができなかった。兄には体調が悪いといい、欠席させてもらった。余計な心配をまたかけてしまったのだけれど、もうすぐそれもなくなると思えば……仕方がないのかもしれない。

普段ならば授業を受けている時間に部屋にいと、ひどく違和感を感じてしまう。今はそんな場合ではないのだけれども。一人部屋の中で、考える……どうするべきか。

今通っている学校は、好きではない。学校に好きで通ってる人なんてほとんどいないだろうけど。特別大事なものも……ない。強いて言えば、自分の命かもしれない。死にたくはないと思うから。

本当に気にかかっているのは、兄さんのことなのだけれど。わたしがいないほうが面倒を見なくて済むから、楽になるはずだわ——わたしがそう思い込みただけなのだけれど。わたしは我侭だから、すぐ心配してしまうとしても、きつと選んでしまっただろうから。兄さんは、幸せになるべきよ。いつまでもわたしのことなんか気にしてないで。兄がどう思っているのかは、怖くて聞けないけれど。

こんなに臆病なわたしはどこかへ行こう。記憶を抱えたまま、誰も知らないわたしになろう。痛いのは正直嫌だけれども、仕方がないと思う。ただひとつ気になるのは……彼は連れて行ってくれるのかしら？ 時間をやるというていたからなのか、昨夜は来なかった。子守は嫌だといっていたけれど、一人で置いていかれるのは嫌だ。そうなるくらいなら、死んでしまったほうがまし。もう二度と置いていかれたくないから。

置いていかれたくないのに置いていくなんて、矛盾しているのだけれど。

死ぬかもしれないのに、わたしは何を考えているんだろう。一人部屋の中で、自嘲気味に笑った。

とりとめのないことを考えながら、そわそわと夜を待った。

夜も深くなるころ、ベランダから窓を開けて彼は部屋へとやってきた。わたしはベッドに入って本を読んでいた。この前はいきなり消えたけれど、今日は普通に現れた。なんだかそれがとてもおかしくて、わたしは小さく笑ってしまった。何を笑っているのか、と眉をひそめられてしまったけど。窓際に佇んだまま彼がわたしに言った。

「それで……結局のところはどうするんだ？」

「死んでしまってもいいから、お願いしたい」

これから先の日々よりも、わたしにとってはこの夜のほうが大切で。今日でわたしがいなくなってしまうとしても、後悔はしない。

わたしは……自己中心的で、我侭で、おまけに頑固だから。

「死という言葉をやすく口にはしないことだな……まあいい始めるぞ」

わたしが心の中で独り言をいっていると、彼がそういった。

「準備とかは特に何も無いのね」

「必要なのは、お前の覚悟、それだけだ」

そういうと彼はベッドへと近づいてきて、わたしの背中へと手を回した。上半身を起こしたまま、背中を支えられるような体勢になった。

「深呼吸をしたら、息を止める。うつかり舌を噛むなよ……」

わたしは言われたとおりに深くゆっくりと、深呼吸をした。知らず知らずうちに、心臓がときどきとしているのが感じられた。息を止めて、一度瞼を閉じてから再び目を開けた。軽く視線を彷徨わせていると、彼の腕が後ろに一度引かれて——直後にわたしの胸を衝撃が貫いた。

唇から、くぐもった音がこぼれた。腕で貫かれたのだとわかった

のは、それから少し後のこと。点滅する視界の中、彼の腕が見えたから。何かを確かめるように手が動くたびに、熱さが喉へとせりあがってくる。歯を食いしばりすぎたのか、口の中で鈍い音がしたように感じた。ぐらぐらとする視界の中、彼の手が何かを握りつぶして、わたしは悲鳴をあげたのだと思う。呼吸ができていたのか、声がでていたのかなんてよくわからない。ばやけていた視界が急激に黒に塗りつぶされて、意識が遠のきかける。開いているのかもわからなくなつて、瞼を閉じようとしたとき……口の中に苦味が広がって、視界がすこしだけばやけて見えた。いつの間に近づいていたのかわからない。彼の顔が遠のいてから、今のは血の味だったのだと気が付いた。一度は見えるようになった視界も、次第にまたばやけかすんでいく。熱さも痛みも、何も感じなかった。フェードアウトしていくなか、自分の胸を見ると真っ赤に染まっていた。まるで花が咲いたようだと思った。今度は確かに瞼を閉じて、暗闇のなかへと意識を溶かしていく。

何もかもがあいまいになつていく意識の中……

「明日の夜……迎えに行く。準備をしておけ」

そんな、彼の声が聞こえた。

選択した夜（後書き）

自分で選択したのならば、後悔なんて消しましょう。
ためらいなんて気にしない、気にしない。

さて、次でラストとなります。

たいしたものでもないですが、お付き合いいただけますよう。
それでは。

さようならを、わたしと貴方に（前書き）

ここではない何処かへと、誰も知らないわたしのまま、あなたと二人。

さようならを、わたしと貴方に

翌日、兄が部屋の扉をノックする音でわたしは目を覚ました。勢いよく飛び起きて、自分の胸に手を当てる……傷も痛みも、赤色も何もなかった。あんなに強烈な痛みだったのに。信じられなくて、わたしはベッドのシーツ、服を確認したけれども、普段どおりだった。先ほどもより強くなったノックで我に返って。慌ててドアを開けた。

「おはよう、兄さん。どうしたの？」

「どうしたの、じゃない。急がないと遅刻するぞ？」

そういわれて部屋の時計を見ると、始業時間ぎりぎり。……どうあがいてもすでに遅刻だった。

「今日はね、ちょっと具合が悪くて寝てたの。学校は、休むわ」

そういうわたしを、兄はまじまじと見た。本当は体調が悪くないのが、ばれてしまったのかしら。落ち着かなくて、視線をさまよわせる。

「そうか……確かに目も少し充血しているしな。ゆっくり休んだ方がいい。最近、無理してるようだからな」

「別に、無理はしてないわ？　ちょっと欠席が多いかもしれないけれど」

「よく休め、ということだ。連絡は自分でできるな」

「ええ、大丈夫。今夜も遅いの？」

「ああ。悪いとは思ってるんだが……仕事を立て込んでな。じゃあ、いつてくるから」

「うん、いつてらっしゃい、兄さん」

ドアを閉めてからわたしは慌てて付け加えた。

「兄さんも、身体には気をつけてね」

ああ、という微かな声が聞こえて、兄の足音が遠ざかっていった。聞こえないとわかりつつも、わたしはもう一度、いつてらっしやいと呟いた。ドア越しに、最後になるかもしれない挨拶を。

兄が仕事へ行った後、わたしは部屋のカーテンを閉めた。いつもよりも、差し込む光が眩しく感じられたから。身体をもう一度確認してみたけれど、特におかしなところはなかった。ほんのすこしだけ、兄の言ったとおり、目が充血というか……赤みがかってはいたけれど。特別優れてもいないけれど、別段悪くもない。頭の辺りが若干ふわふわとした感じはあったけれど、考え事をするのには何の問題もなかった。ただ少し喉が渴いていたから、リビングへ行つて水を飲んできた。

一つ深呼吸してから、昨夜の彼の言葉を思い出してみる……準備をしろ、と言っていた。いったい何の準備かと思っただけれど、どう考えてもわたしがここを出て行く準備だろう。億劫に感じる反面、連れて行ってもらえるのだという奇妙な安堵感も感じた。部屋の中を見渡してみても、持ち出したいものを探す。絶対に持っていくのは一冊の愛読書。これだけは、譲れないわ。それを本棚から取り出すと、小さな手さげカバンへとしまった。服の替えもいくつかもっていかうかとも思っただけれど、遊びに行くわけじゃない。無駄なものは持つていかない方がいいに違いないと思った。結局他に持つていきたいものは見当たらなかった。

ただ、ベッドサイドの写真立ては二つとも、写真を裏返して入れて置いた。兄さんならきつと捨てないで、とっておいてくれるはず。その写真立ての側に、携帯電話も電源を切って置いた。もう使うこともないだろう。もともと、必要最低限の連絡にしか使ってなかったのだけだ。

それからわたしは、兄の分の夕食を作りリビングへと向かった。早すぎるとは思っただけれど、あれやこれやとしているうちに、だんだんと眠くなってきたから。さっき起きたばかりだつていうのに。ぶつぶつといいながらも仕度を進めると、普段よりも料理の

匂いが鼻についた。しつかりとラップをして、冷蔵庫へとしまう。作り終える頃には、猛烈な眠気に襲われていた。でも、せめて寝巻き以外に着替えておかないと……まぶたがくつつきそうになりながらも、上はシャツと上着、下はジーンズへと着替えた。念のため、靴も部屋へと持ってきておく。なんとかそこまで済ませてから、わたしはベッドへと倒れこむ。瞼を閉じると、瞬く間に眠りへと落ちていった。

眠気に襲われるのも突然だったけれど、覚醒も突然だった。

ぱちりと、いきなり目が覚めて。わたしは目を細めながら、部屋の時計を見た。時間は……深夜の一時頃だった。兄さんは、もう帰っているのかしら……？ それにしても昼間から、こんな時間まで眠っていたのかとかなり驚く。もはや睡眠時間とかそういう問題じゃないわね……やっぱり、どこかおかしいのかしら。そうは思ったものの、体調は昼間よりはすこぶるよかった。

頭もすっきりとしているし、心なしか昼間よりも暗いのに、よく見える。

窓の外を見ると、綺麗な満月が浮かんでいた。暗闇でも見えるのが珍しくて、きよろきよろとしていると。

「やっと起きたのか」

窓の側から彼の声が聞こえて、わたしは飛び上がりそうなくらいに驚いた。

「ちょ……あなたいったいいつからいたの？」

ベッドの側へと立つ彼に問いかけた。まさか寝ているところを見られたりはしていないだろうか。

「ついさつき、な」

答えになっているのかわからない返事が返ってきて。わたしは何かを諦めた。気にしないのが一番だろう。

「体調など、変わったところはあるか」

そういわれて、わたしは気になっている部分、変わったところなどを話した。彼はそれを聞いて少し考えるような仕草をした。

「それと、喉がやたらと渴くわ。水を飲んでいけるけれど」

「……あとでまた飲めば収まるだろう」

何を、とは思ったけれど、わたしは聞かなかった。代わりに聞きたいことがあったから。

「ねえ、髪の色を変えることって、できるのかしら？」

彼の上着の裾を引っ張りながら、そう聞いた。昏間鏡で見たとき、目の色は少し変わって見えただけれど、髪の色は黒いままだったから。彼はいきなり消えたりできるんだから、出来るような気がしていたのだ。

「何でそんなことを……」

彼は眉をしかめながらわたしを見た。何の意味があるのか、と聞かれているように思った。

「前から、変えてみたいと思っていたのよ。あなたならたぶんできるでしょう？」

それくらい自分でやれ、と突き放されてしまった。何をどうやるのやら、まったくわたしは知らない。そのまま諦めずに、しばらく彼と押し問答していると……深いため息をつきながら彼がいった。

「……何色に、しろというんだまったく」

そう問われて、わたしの頭の中を、太陽の光に反射して光る、金髪がよぎったけれど。窓の外の満月を横目で見て。

「月……」

今なんといった？ そんな怪訝な顔で見つめられてしまったので、今度はしっかりとという。

「あなたが見上げている、月の色がいいの」

不思議そうに彼は瞬きをしてから、わたしに目を閉じるようにいった。今度は痛みはないだろう。目を閉じていても、髪に彼の手が触れるのが感触でわかった。声に促されて、わたしは目を開ける。視界を掠めた色に驚きつつ、テーブルから手鏡を取り、姿を映した。

「あなたには、月が赤く見えているのね」

わたしの髪は、赤い、赤い色に変わっていた。緋色というよりも、深紅に近いかもしれない。深いけれども、はっとするくらい鮮やかに見えるときもある。……とっても綺麗な色。素直にそう思った。

「お前の瞳と、同じ色だ」

そういわれて鏡を見ると、確かに赤色だった。髪よりもずっと薄い色だったけれど。いつのまにこうなったのか。そんなことはもうどうでもよかった。誰がみても、わたしだとは気づかない姿になった。嬉しいのか寂しいのかよくわからない。

静かにたたずむ彼へとわたしは聞いた。

「子守は嫌といっていなかったかしら……」

「俺は、子供は嫌だといったんだ」

つまり、馬鹿なことをしなければ、大丈夫なのかしら……？　すっかりすればいいのよね。わたしはそう思い込むことにして、色が変わった髪を手で弄んでいた。すると、突然控えめなノックの音が聞こえて、わたしは自分の耳を疑った……

「洩、ちよつといいか？」

続けて聞こえてきた兄の声に驚いて、わたしは今度こそ飛び上がった。やっぱり、兄さんはもう帰っていたのね。わたしはベッドに入ったまま返事をした。

「眠っているならいいんだが……」

「まだわたしは起きてるわ。どうしたの、こんな時間に？」

「いや、特に用があるわけではないんだが、な。開けてもいいか？」

わたしは兄にそう聞かれて、思い出した。――わたし、部屋の鍵を掛けてないわ。

どうしたらいいかと焦りながら、隣の彼を見たが、無言でドアの方を見ているだけで。ガチャリと響いたノブの音でひやりとしたけれど、何故かドアが開くことはなくて、代わりに。

「行くぞ」

隣の彼がそういったのが聞こえた。その言葉を聞いて、わたしは

ほんの少し戸惑った。何も今じゃなくても……そういう思いもあったのかもしれない。でも、今行かなくていついくのだろう。矛盾している。

「いるなら開けてくれないか？ 何か嫌な予感がするんだ」

「兄さん、それはきつと気のせいよ。何も無いもの」

「ならどうして開けないんだ、遷つ？」

今まで、聞いたこともない必死な兄の声を聞きながら、わたしはベッドから降りる。

「平気よ。何も無いんだから」

そういいながら、彼の傍らへと近寄る。そう、何も無いわ。嫌な予感なんて、気のせいに決まってるわ。わたしはもうじき、何処かへいつてしまふんだもの。気にすることなんて。

そうしている間にも、ドアノブの音は激しく大きくなるものの、以前としてドアは開かない。ほんの少しだけ、その大きな音を怖いと感じるわたしがいた。

「くっそ……何で開かないんだ？ 遷、鍵を掛けてるなら開けてくれないか。それとも壊れてるのか？」

答えないまま、わたしは彼につれられてベランダへと来ていた。ここには、落下防止用の柵……というか手すりがついている。とても頑丈なものだ。

「ここから、先に降りている」

彼はそういうと、ベランダの下……地面を指差した。……………わたしの部屋は二階なのに。

「ちよつと、無茶いわないで」

小声で彼にそういったのだけれど。

「無理ではないだろう、平気だ。今部屋をでていくのと、どっちが無茶か考えろ」

そう彼にいわれて、手すりの上まではなんとか登った。手すりに腰掛けている状態で、下をのぞき見て。その中途半端な高さに不安がいつそう募る。死にはしないだろうけど、どうみても無事で済む

とは思えない。

「や、やっぱり無理よっ」

身体の向きを変えて戻ろうとしたとき、すっかり手を滑らして、落ちかけた。手を慌てて伸ばしたけれど、手すりには届かなくて。

「えっ……嘘——きやあっ!？」

地面に向かって、落ちる、と思ったとき、すごく強い力で上へと引つ張りあげられて、肩の骨がわずかに軋んだ。そのまま、部屋の中まで引つ張られた。驚きに目を見開いたままのわたしの前に、焦った顔をした彼がいて。

「この馬鹿がつ！頭から降りる馬鹿が何処にいる!？」

ここにいる、といったかったけれど、もつと怒られてしまいそうだったから。

「今のは降りたんじゃないわ。落ちたのよ、予想外の事故なのよ……

……ああ、死ぬかと思った」

わたしは座りこんでしまった。……また腰を抜かしたみたい。情けないと思う間もなく。絶え間なく聞こえていたノブの音が一瞬だけ止んで。

「おい——他に誰がいるのか? ……………誰だ」

とても低い、押し殺したような兄の声が聞こえて、自然とわたしの身体はこわばった。めったに兄さんは怒らないのに……今、きつと怒ってる。頼りない、わたしに対して? それとも、彼に対して? 「零……ドアの側にいるなら、危ないから離れておけ」

そういう兄の言葉が聞こえたと思った瞬間、何かを壊すような強い音がして、ドアが蹴破られた。

「ちよっと、兄さん!？」

「ちっ……行くぞっ」

わたしは驚いて、思わず兄を呼んでしまった。彼はドアが蹴破られたの見るなり、わたしを横抱きにしてベランダから飛び降りようとした。わたしはそんな彼の服を引つ張る。あともう少し。もう少しだけ待つて欲しい。

「準備はしておけといったはずなんだがな」

忌々しそうにいいながらも、わたしを横抱きにしたまま、ベランダのすぐ側で彼は立ち止まった。

「漣っ!？」

傾いてしまったドアを尻目に、兄が部屋の中へと飛び込んできた。そのままの勢いで、わたし達の前へとやってきた。わたしは彼に抱えられたまま、首を後ろに向けて、兄の目を真っ直ぐにみた。一瞬、兄が怪訝そうな顔をしているのがわかったけれど。気にせずに、わたしは兄に向けて、お別れを。声には出さずに、さようならの言葉を紡いだ。兄さんにはちゃんと伝わったかしら……？ 確認を、してはいけないのだけれど。呆然とわたしを見つめる兄をその場に置いて。

「行きましょう」

わたしは彼にそう声掛けた。その声を聞いて、兄がわたしの方へと手を伸ばしたけれど。その手が届くことはなく、微かに髪に触れただけ。――彼は、わたしを抱えてベランダから飛び降りた。微かに聞こえる兄の声を感じながら、今度は声に出して呟いた。

「さようなら、兄さん」

この声も、きっと届かない。

いつまでたっても開く気配のないドアに痺れを切らして、渾身の力を込めて蹴破った。

そうして漣の部屋へと入ると、見知らぬ男と赤髪の女性がいた。男が女性を横抱きにしていて、今まさにベランダから降りようとしているようだった。一瞬戸惑ったものの、女性の顔を見て、すぐに妹だとわかった。姿が変われど、見間違ふことなどありえない。何

が起きているのかまったくわからず、漣を呆然と見ていると、彼女の唇が動いて。――どうして、さようならと動いたのか。それが理解できずに、呼びかけられない。そうしているうちに、漣の声が再び聞こえて。慌てて手を伸ばしたけれど、彼女の髪に触れたただけですり抜けていった。

二人が飛び降りてすぐ、ベランダから下を覗き込んだが、誰もいない。暗いとはいえ、満月だ。それなりに明るいいし、そう遠くにはいつてないというのに見つけられなかった。

「確かに、今触れたのに」

急激に眩暈を覚えてよろめき、ベッドに片手をついた。ふと、サイドテーブルに置かれた写真立てに目が止まった。

「これは確か……一緒に映って欲しいと、ねだられたときの」

あの時は、いつもは大人しい漣がしつこくて、ついつい折れてしまった。懐かしさに目を細めながら、写真立てを手に取ると、真っ白な色が映っていて。写真が裏返しになっているのだと気づいた。それに、テーブルには妹の携帯電話が置かれていて。無意識のどこかで、彼女がもう戻らないのだと悟って。写真立てを強く握り締めると……ガラスが割れた音が聞こえた。

「まさか、兄さんがドアを蹴破るなんて……思わなかった」

「ずいぶんと焦っていたようだ？」

月光に照らされながら、人気のない夜道を二人で歩く。

「これで、兄さんも楽になるはずだわ。誰もいないもの。幸せになつてほしい」

ひどくわがままを言っている自覚はあった。

「俺には関係のないことだ。……お前が、選んだのだから」

わたしの隣を歩く彼がいう。そう、わたしは自分で選択したのだ

から。振り返ってばかりもいられない。未練もなにも、全部置いていくのだから。……ぜんぶ。

「そう、それだわ」

急に声を大きくしたわたしに、彼が訝しげにいった。

「いきなりなんだ、やかましい」

「わたし、全部置いてきたから、名前がないの。……付けて？ お前じゃないのは、確かだから」

彼を追い抜いて、振り返りながら言った。名前がないなんて、不便だわ。彼はしばらく考えるそぶりをしてから……

「零。零はどうだ？」

「ゼロ……今のわたしには、ぴったりね、何もない」

わたしはそういつて、彼にたぶん笑いかけた。もしかしたら、泣きそうに歪んだ顔だったかもしれないけれど。そのままの距離を保ったまま、少し無言であるいた。わたしが持つていくのは、この記憶だけ。ただの過去でしかない、記憶。他はこれから見つければいい。

不意に、後ろから聞こえる彼の足音が止んで、わたしも立ち止まった。振り返ると、彼がまっすぐにわたしを見ていた。……初めてかもしれない、まっすぐ見られたのつて。自分のものとは違う赤い瞳を美しく思った。そのまま、彼はわたしにこういった。

「ここから、いったい何処へ行くつもりだ？ 行くあてはあるまい」
何処へ行くか、ですつて？ それをわたしに聞くなんて、ひどい。答えは、一つしかないけれど。わたしは大きく息を吸い込んで、答えた。

「さあ……？ 何処へでも連れてつて。あなたと二人なら、構わない」

「果てがないかも知れんぞ？」

「なら、どこにあるかも解らない、終わりを探しに行きましょう」
おどけたように、くるりと回りながらわたしは言う。一人ではないんだもの。わたしのことも、彼ならきつとずっと覚えていてくれ

るわ。忘れないでいてくれる。何故だかそんな確信があつて。

「夜が明ける最後の瞬間まで、わたしを一人にしないで……それだけいいから」

そういつて、わたしは彼の深い瞳を覗き込んだ。彼は微かに口元を歪めて——笑ったのかもしれない。

「そうか」

一言だけ呟いて、わたしの頭に、ぱんと軽く手を置いた。

思わず泣きそうになって、わたしは空を見上げた。綺麗な、綺麗な満月が夜の空に浮かんで、闇闇を照らしている。強く吹いた風が、赤い髪をさらっていく。わたしの、赤い髪が風に揺られて——

仰ぐ月が、紅く見えた。

さようならを、わたしと貴方に（後書き）

はい、お読みくださりありがとうございました。
仰ぐ月に紅を映して、これにて終わりとなります。

書いてる内にどんどん自己中心的な子になりましたよ。
残された兄が不憫で仕方がありません。

それでは、またどこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8095m/>

仰ぐ月に紅を映して

2010年10月8日14時34分発行